

モノと情報班 B

ミャオ族の衣装ネットワークとローカリティー麻と藍とのかかわりから 宮脇千絵（総合地球環境学研究所）

キーワード：ミャオ族、衣装、麻、藍、雲南省、ラオス
調査期間・場所：2004年10月14～28日 雲南省文山チワン族ミャオ族自治州

Cognition of Locality viewed from the network of clothes among Miao - The case study of relation with hemp and indigo -

Chie MIYAWAKI(Research Institute for Humanity and Nature)

Keywords: Miao, Clothes, Hemp, Indigo, Yunnan, Laos
Research Period and Site: 2004, October 14-28, Wenshan in Yunnan

1. はじめに

本研究の目的は、ミャオ族の衣装というモノに着目し、衣装の製作現場である雲南省から流通先であるアメリカやラオスへと衣装の辿る道を追いながら、それぞれのローカルな場でミャオ族の人々がどのような生活環境をつくりあげているのかをみることである。

ミャオ族は幾度となく移動を繰り返している。昨年の報告書〔宮脇 2004〕で概略を述べたように、19世紀の東南アジアへの南下や、近年頻繁になっている国家間の往来がある。例えば、雲南省、ラオス、アメリカの三国間の往来関係をみれば、1970年代のラオスからアメリカへの難民移動、1970年代後半からはじまるアメリカからラオスへの祖国訪問、そして1980年代から盛んになったアメリカから雲南省への源流観光、それに伴う雲南省からアメリカへの女性の結婚移住などが挙げられる。このような人の移動に伴い、最も活発に移動（流通）しているのが既製民族衣装である。つまり、人と衣装の移動により、ミャオ族はグローバルなネットワークを構築しているといえる。それは、雲南省の他の民族にはみられないことである。言い換えれば、個別の地域に居住するミャオ族同士を繋ぐグローバルなネットワークをつくっているのが既製民族衣装なのである。

2. 調査地の概要

今回の主な調査地は、文山チワン族ミャオ族自治州（以下、文山州と略）の文山県、麻栗坡県、西畴県、馬関県である。麻栗坡県と馬関県はベトナムと国境を接している辺境県である。

文山州には11の民族が居住しており、総人口は約324万人、そのうちチワン族が約97万人、ミャオ族が約41万人など、少数民族が占める割合は総人口の56.5%と高い（2000年）。

今回の調査では、文山県では、「文山県江花民族印染廠」という工場と、自宅で衣装を製作し郵送販売している女性への聞き取り、麻栗坡県や西畴県の村では、同様に自宅で製作し近くの定期市で販売する女性への聞き取り、馬関県では金廠鎮、茅坪のベトナム国境の定期市でベトナムからの買い物客に衣装を販売する人々へ聞き取りを行った。

ミャオ族の既製民族衣装の製作現場や販売形態にはいくつかの種類がある。製作現場としては、①工場や工房、②店舗、③自宅、がある。また販売形態としては、①店舗、②定期市の露店、③郵送、④行商があげられる。店舗を併設している工場・工房では店舗で販売、自宅で製作している者は店舗を構えていないので定期市で販売したり郵送したりするというように、製作現場と販売形態は入り組んでいる。さらに、その流通先も省内、国内に留まらない。アメリカやラオス、ベトナムなど欧米や東南アジアに広く分散するミャオ族の元へも流通しているのである。また、製作、販売に関わっているのはほとんどがミャオ族である。



雲南省地図



文山チワン族ミャオ族自治州地図

このように、ミャオ族の既製民族衣装は、製作現場、販売形態、流通先、担い手のいずれの側面においても多岐に渡っており、なおかつ相互に錯綜しているのである。

3. 既製服化に伴う麻、藍の減少

ミャオ族の既製民族衣装をめぐるには、上記のような錯綜した状況と、グローバルな動きがみられる。一方、衣装が実際に作られている現場に目を転じると、衣装の既製服化に伴う人々の自然利用や生活環境の変化もみられる。一例として文山州では、既製服化に伴って素材である麻と藍の減少が顕著であることが挙げられる。これまで麻と藍は、ミャオ族の衣装の素材として重視されてきた。衣装が家庭内で作られていた頃、その製作は、女性による麻の栽培から始まった。女性たちは麻を栽培、収穫し、紡ぎ撚りをかけ、煮てやわらかくし、織るという工程を経て麻布をつくる。そこに藍でロウケツ染めをし、幾何学模様を施すという具合である。スカートであればさらに、細かいプリーツをつけ、刺繍をする。一枚のスカートをつくるのに、10ヶ月の時間と6メートルの麻布が必要とされた。このように、従来ミャオ族の女性が衣装制作に費やす時間と手間は膨大なものであった。

しかし、自宅での制作から既製服を買うという変化により、麻と藍は化繊の布やロウケツ染め風プリントに取って代わられた。製作、販売する側のメリットとして、ロウケツ染め風や、ミャオ族風のプリント布をミシンで縫い合わせるだけですむので、これまでのように一枚の衣装に数ヶ月の手間と時間をかける必要がなく、1日に数枚の衣装をつくることのできるほどである。購入、着用する側のメリットとしては、自分で製作する手間と時

間が省けること、麻のスカートに比べて軽く活動的であること、汚れにくいこと、汚れても洗濯しやすいことなどの便利さが挙げられる。

しかし、麻の使用が減少した要因は、既製服化に伴う制作方法の変化や消費の変化によるものだけではないことを以下に示す。

4. 政策としての麻栽培禁止

文山州の人々は麻が減少した理由のひとつとして、「政府に栽培を禁止されているから」と答える。それは「無毒社区」工作を意味する。

「無毒社区」工作とは、麻薬の吸引禁止、販売禁止、栽培禁止、製造禁止を掲げた国家政策である。1999年に国家禁毒委員が全国で展開し始めた。雲南省でも2000年から「無毒社区」工作が始まった。2002年には、雲南省の水富県、西畴県、屏辺県、昌寧県、双江県の5県が「無毒県」という称号を雲南省政府より与えられた。この「無毒県」に選ばれる条件が、新たに麻薬をはじめた人がいないこと、かつて麻薬を使用していた人が3年以上麻薬を絶っていること、販売や輸送をしていないこと、簡単に麻薬となる化学薬品を販売していないこと、生産や加工をしていないこと、そして麻薬の原料となる植物を栽培していないこと、である。

原料となる植物の栽培禁止とは、麻の栽培禁止のことに他ならない。しかし実際に話を聞いてみると、禁止された時期はまちまちである。西畴県の花ミャオ族の村の女性は、2年前に栽培を禁止されたと語った。しかし、文山県の子ミャオ族の村の女性は、70年代後半には禁止されたと答えた。

いっぽうで、定期市を回っていると、麻を紡ぎながら歩いているミャオ族の女性をよくみかける（写真1, 2）。露店でも、表向きは並べられていなくても、見えないところに麻糸、麻布、麻のスカートを隠し持って、販売している人もいる。麻の栽培は禁止されているのではないか、という筆者の問いに対し、麻栗披県の子ミャオ族文化に詳しい男性は、自動車道路沿いの目立つ村でなければ栽培はかまわなく、警察も見ても見ぬふりをしている、と答えた。また、西畴県の子ミャオ族の村の女性は、今も少量だが栽培していると答えた。さらに、文山県で衣装製作をしている女性は、麻布を織っている村はまだあるし、手に入れようと思えば定期市で手に入ると答えた。

つまり、いっぽうでは、政府による麻栽培禁止が麻の減少に結びついているのは確かだが、たほうではミャオ族の人々は依然として、麻栽培の抜け道を持っているのである。



写真1. 麻を紡ぎながら歩く女性



写真2

5. ミャオ族にとっての麻

麻の栽培が表向きには政府によって禁止されているにもかかわらず、政府の目を盗んで栽培されて続けているのは、麻がミャオ族の精神とも深く結びついているからである。例えば、ミャオ族は死者に麻の衣装を着せる。この麻の衣装は、死者があの世界で先祖と出会える目印となる。もし着ていなければ先祖も死者も互いに互いを見つけ出すことができない〔古 2001：204〕。だが麻の減少により、死者に麻布を準備できなくなることを危惧する声が聞かれた。また、普段着としては化繊布の衣装を着用しつつも、麻布のスカートを大事に取っている女性は多い。

化繊布の手軽さを教えてくれた既製服化と、麻の減少に拍車をかける「無毒社区」工作という、2つの要因により、麻の減少は止まらないかのように思われる。しかし、密かに栽培するなど、ミャオ族のしたたかな行動をみることで、彼らの自然資源の利用や雲南省での生活環境の変化が一様ではないことを知る手がかりを見つけられるのではないだろうか。

6. 藍の減少について

これら麻の減少と同時に、藍も減少している。既製服化や「無毒社区」工作により、これまでの衣装製作の技術は忘れられ、道具も失われていく。今回、いくつかの家で衣装製作に関する道具をみせてもらった。紡績車、織機、ロウケツ染め用の銅刀（写真3）、麻布に艶を出す石製ローラーなどがあったが、やはりここ数年で使用しなくなったものばかりだという。麻布をつくる必要がなくなれば、藍によるロウケツ染めを施す必要もなくなる。そして、それは藍栽培の減少にも繋がる。西畴県の花ミャオ族の村の女性は、今でも藍を栽培していると答えたが、今回の調査では、それ以外のミャオ族からは藍の栽培の話聞くことができなかった。むしろ、ヤオ族など他の民族から買っているという人が多かった。広南県のヤオ族の村では藍を建てるための藍甕がみられた（写真4, 5）。やはり、このヤオ族も作った藍を市場で売っているという。広南県と西畴県、麻栗坡県などは相互に距離が離れていることもあり、直接売買されているわけではないだろうが、藍の栽培と製作には民族ごとのかわり方の違いがみられるといえるだろう。



写真3. ロウケツ染め用の銅刀



写真4. ヤオ族の藍甕



写真5. ヤオ族の藍甕

7. ラオス、ベトナムへの波及

このような既製服化に伴う麻と藍の減少の影響はラオスやベトナムへも波及している。文山県の「文山県江花

民族印染廠」では、主な販売先はアメリカだが、1998 年からラオスにも販売を始めている。西双版纳タイ族自治州に住む行商人（ミャオ族）が買い付けに来て、ラオスへ売りに行くのだという。また、馬関県の金廠鎮や茅坪などベトナム国境の村での定期市には、ベトナムからの越境民が多く訪れていた（写真 6, 7）。彼らの多くはミャオ族、チワン族などで、手続きをすると簡単に国境を越えてくることができる。これらの定期市にも、ミャオ族の既製民族衣装を売る露店が 10～20 数店でており、ベトナムからのミャオ族を得意客としていた。雲南省で製作された既製民族衣装は、確実にラオスやベトナムにも広がっているのである。



写真 6. 馬関県金廠鎮の定期市



写真 7. 金廠鎮からベトナムへ戻る人々

実際に、ラオスのフアパン県サムヌアでみられた一連の衣装製作〔安井 2000〕が、2、3 年前から雲南省から既製民族衣装が流入したことより、もはや過去のものになりつつあるときく。

そうすると、ラオスやベトナムでも雲南省同様に、麻や藍の栽培と使用が減少するのではないだろうか。つまり、雲南省の一地域で生じた出来事が、国境を越えて多方面に波及しているといえ、衣装をめぐるネットワークが、各地域のミャオ族の資源利用と生活環境に変化を及ぼしているといえるだろう。

8. まとめ

ミャオ族の衣装を扱う面白さは、人と衣装のグローバルなネットワークが構築されていることを知ることができることにある。グローバルなネットワークと、ローカルな場で生起する出来事の両者に着目し、それぞれを突き合わせて詳細に検討することは、より幅広い文脈でミャオ族の自然資源の利用や生活環境の変化を掴むことを可能にする。雲南省やラオスというローカルな場において、素材である麻や藍とのかかわりから、衣装制作にどのような変化が起こっているのか、またそれが国境を越えてどのように広がっていくのかを明らかにし、ミャオ族社会の動態を探ることを、今後の課題とする。

引用文献

古文鳳

2001 「苗族麻紡績文化略論」雲南省社会科学院民族学研究所編『民族学（2000）』190-208. 民族出版社

Louisa Schein

2004 HMONG/MIAO TRANSNATIONALITY: IDENTITY BEYOND CULTURE In Nicholas Tapp, Jean Michaud, Christian Culas, Gary Yia Lee ed., HMONG/MIAO IN ASIA: SILKWORM BOOKS, pp273-290

宮脇千絵

2004 「ミャオ族の民族衣装が結ぶ文化—モノ研究の視点から—」『研究プロジェクト 4-2 2003 年度報告書』337-339

安井清子

2000 「ラオスの山の民ブルーモン スカート刺繍に縫いこむ思い」『季刊民族学』92 号：69-81. 千里文化財団